# 初恋と初恋。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋と初恋。

【Ｎコード】
Ｎ３２２８Ｍ

【作者名】
はなちょこ

【あらすじ】
中学生一年生。
恋愛には興味がなかったはずの主人公が、あるモノがキッカケで恋の気持ちを知る。

休み時間。
騒がしい教室でも読書に集中できるようになったのは、中学一年の終わり頃。

「なっちゃん！」
その声に顔を上げると。
目の前に立っていたのは友人の茜だった。
「こんな間近で大声で呼ばないでよ」
私はそう言いながら本に視線を落とした。
「なっちゃんって漫画、読む？」
「・・・・・・茜。あんた人の話、全然聞いてないでしょ」
「そんなことないよー。それよりさあ、小説しか読まないの？」
「漫画も好きだよ」
本から目を離さずにそう答えると。
机の上に何かが置かれた。
視線をそちらに向ける。
それは一冊の漫画だった。
少女漫画だ。
タイトルは『初恋』
「これ、すごく良かったよ！　なっちゃんも読んでみて！」
茜の言葉に眉間に皺を寄せながら尋ねる。
「だってこの漫画、恋愛でしょ？」
「そーだよ」
「私、恋愛漫画は読まないの」
「えー！　なんで？」
「だって興味ないから」
「じゃあ、どういう漫画読むの？」

こちらに身を乗り出しながら茜がそう尋ねる。
「少年漫画」
私がそう答えた時。
隣の男子がこちらを見た。
そして彼は遠慮がちに私に尋ねてきた。
「少年漫画好きなの？」
「うん。お兄ちゃんの影響で」
「俺、毎週、『ウェンズデー』買ってるんだけど、なに読んでる？」
「私も『ウェンズデー』買ってるよ」
男子の目がキラキラと輝いていた。
そして私の胸も躍っていた。

「なっちゃーん」
茜の声でハッとした。
「とりあえず、この漫画は貸しておくからね」
彼女はそれだけ言うと自分の席へ戻っていった。
私の机の上にはポツンと『初恋』が置かれていた。
「・・・・・だから読まないって言ってるのに」
溜息をつきながらそう言うと、それを鞄の中にしまった。

その日、家に帰って部屋でゴロゴロしていると携帯が鳴り響いた。
慌てて携帯を探すと、鞄の中に入れっぱなしだったことに気づいた。
鞄の中には漫画が一冊。

そう。
茜が置いていった少女漫画。
「・・・・・・忘れてた」
私は頭を掻きながらポツリと呟いた。

メールを送信し終わると
『初恋』を読んでみることにした。

主人公の愛は中学二年生。
彼女は同じクラスの武に一目惚れをする。

最初のシーンはそんな説明と
愛が武を見てドキッとして頬を赤く染めているところだった。

「ベタだなあ」
私はそう言うと漫画を閉じた。
恋愛漫画には興味がない。
もちろん恋愛にも興味はない。
初恋だってしたことない。
だからって恋をしてみたいとは思わない。

「野々宮。おはよ」
後ろからそう挨拶してきたのは森山だった。
一年の終わり頃に私の隣の席だった男子。
あれから少年漫画の話題で少しずつ話すようになったのだ。
そして。
森山とは二年も同じクラスになった。
「おはよう。そうそう。『銀色のガッチュ！！』の新刊でてたよ」
「マジで？！　とうとうクライマックスの戦闘じゃん！」
「そーなんだよ。私もそこが気になっててさあ。お兄ちゃんが買ってたから読ませてもらっちゃった」
「うわ。いいなあ。俺も今日の帰りに早速、本屋に寄らなくちゃ」
「売り切れてないといいね」

「そんなこと言われると今から買ってきたくなるだろ！」
森山はそう言って笑った。
私も笑う。

「ねーねー。知ってるー？　鈴木って雅のこと好きらしいよ」
「えー！マジで？　私も鈴木のこといいなあって思ってたんだよね」
トイレの洗面所の前で二人の女子がお喋りをしていた。
私が手を洗っていると茜が前髪を直しながら言った。
「なっちゃんさー」
「ん？」
「森山のこと好きなの？」
「は？」
私は驚いて茜を見た。
彼女は屈託のない笑みを浮かべながら言う。
「ま、いいや。私が貸した漫画はちゃんと読んでから返してね」
「え？　別に明日にでも返すよ」
「せっかくだから読んでよ。返すのはいつでもいいから」
茜はそう言うと蛇口をキュッとひねった。

主人公の愛は武と隣の席になり
二人の距離は徐々に縮まっていった。
しかし、そんな時。
武に好きな人がいることを知る。

そこまで読んで本を閉じた。
「・・・・・・つまんない」
私はそう言って少年漫画を本棚から取り出して読み始めた。

「俺、好きかもしれない」

中学に入って二度目の夏が過ぎた頃。
掃除中にポツリと森山が言った。
私は箒を持つ手を止めて顔を上げた。
「なにが？」
「マジで好きなんだよ！」
箒を振り回しそうな勢いで森山が言う。
「だから何が！」
「『アッチ』のヒロインのマナミちゃんが！」
「・・・・・・随分、古い漫画だね」
「従兄妹がくれたんだ。『アッチ』全巻。マナミちゃんは可愛いよ」
「アニメでは見たけどね」
「アニメより漫画のマナミちゃんの方がいいって」
「はいはい」
私はそう言って再び箒で廊下を掃いた。

愛は武に他に好きな人がいることを知りショックを受ける。
そして、自分の気持ちの大きさに気づく。
こんなに好きになってるなんて思わなかった。

「はあ」
私は溜息をついて本を閉じた。
私が好きなのは。
恋愛なんてちっぽけなモノじゃない。
そんな一時的な感情じゃない。
私が好きなのは。
ワクワクするような冒険とか
支えあう仲間とか
どんな困難にも立ち向かえるような強さ。
恋愛なんていらない。

「野々宮！」
そう呼ばれて振り向いた。
森山が走ってこちらに来た。
「ちょっと・・・・・・お前・・・・・・・」
彼は息を切らしながらそう言う。
「なに？」
「屋上・・・・・・・」
「屋上？」
「行くぞ！」
森山はそれだけ言うと勢いよく廊下を走り出した。
私もつられて走り出す。
廊下を駆け上がる。
一段飛ばしで。
足がもつれそうになる。
瞬間。
手首を掴まれた。
私は驚いて森山を見た。
「危いなあ」
彼は私に背を向けたままそう言った。
左手が温かい体温に包まれた。

バンッ。
屋上の重い扉を勢いよく開ける。
ファンスの前まで来ると森山が立ち止まる。
「ほら。あそこ」
彼は空を指差した。
そこにはうっすらと虹がかかっていた。
「綺麗・・・・・・」
自然とそう呟いていた。

虹が消えると。
左手にふと違和感を感じて目をやった。
私は繋いでいた手を慌てて振りほどいた。
「あ、ごめん」
森山の言葉に私は俯いた。
何も言えなかった。

愛は中学三年になった。
武とはクラスが離れてしまったうえに彼が両親の都合で来年からアメリカへ行ってしまうことを知った。

「アメリカ、ね」
私はそう言って本を閉じる。
私もこの漫画の愛と同じ中学三年生になった。
森山とはクラスが別々だ。
だからどうってわけじゃない。
漫画のことを話せる相手がいなくなったのはちょっと寂しいけど。

「え？　東京？」
私は思わずそう聞き返した。
「うん。やりたいことがあってさ。だから東京にある高校を受験するんだ」
そう答えた森山がやけに大人びて見えた。
自動販売機にもたれてイチゴミルクを飲む。
ここから長く伸びた廊下が見渡せる。
「なんでそんなこと私に話したの？」
「だって俺ら友達じゃん」
森山がそう言って笑った。
「ああ・・・・・そうだよね」
「もしかして友達だと思ってたのって俺だけ？」

「そんなことないよ」
私は笑いながら言った。
笑顔がひきつった気がした。

愛はいつか武と離れてしまうと知っても、どんどん彼に惹かれていった。
愛は知らない内に武を目で追っていた。
それは全て彼女の中で思い出となっていく。

私は勢いよく漫画を閉じた。
そしてベッドに寝転んだ。
受験勉強、しなくちゃ。
でも・・・・・・やる気が出ない。

自動販売機はいつも廊下の隅にあるやつを使う。
決まってカフェオレ。
左利きなのに箸は右でしか持てない。
国語の時間はいつも居眠りして先生に怒られる。
私を見るといつも漫画の話をしてくる。
好みのタイプは『アッチ』のマナミちゃん。
中学最後の運動会の時。
リレーのアンカーで必死に走る森山の横顔。
こんなに男の子をカッコイイと思ったのは初めてだ。
文化祭では焼そばを作っていた。
あんなに美味しい焼そばを食べたのは初めてだ。

ねぇ、武君。
アメリカになんか行かないでよ。
そう言えたらどんなに楽だろう。

私は漫画から目をそらして部屋の窓を開けた。
夜の風が心地良い。
真っ暗な空に、虹が見えた気がした。
左手をギュッと握って呟いた。
「東京でもどこへでも行けばいい」

「野々宮ー！」
そう言って森山が嬉しそうな顔で近寄ってきた。
「なによ。『はやあしのごとく』の新刊でも出た？」
私の言葉に森山は首を振る。
「それよりスゴイんだって！　俺、ナキより頭いいかも！」
「はあ？　何言ってんの？　ナキは森山よりずーっと頭いいよ！」
「アハハ。そうだな。でも俺も負けてないよ」
「なにが？」
「塾の先生がさ、このままなら、志望校合格間違いない、って」
「・・・・・・そっか」
「ん？　なんか野々宮、元気ない？」
「ううん。ちょっと受験勉強で寝てないだけ。良かったね」
「そっか。野々宮も頑張れよ」
森山はそう言うとくるりと私に背を向けた。
私はその背中をしばらくの間、見つめていた。

愛は卒業式を迎えた。
そして。
武に告白できずに学校を後にしてしまう。

私はそこまで読んで本を閉じた。
それを鞄にしまう。
明日は卒業式。
この漫画、茜に返さないと。

2人は・・・・・・愛と武は、二度と会えないんだろうか。
私も明日で森山とは二度と会えないんだろうか。

次の日。
卒業式は雲一つない晴天・・・・・・ではなく。
どんよりと雲っていた。

式が終わった後、教室に戻ると。
私は『初恋』を茜に返した。
彼女はニッコリ笑って言った。
「良かったでしょ？」
「良くない」
「え？」
「だって愛が武に告白しないんだもん」
私はそれだけ言うと教室を出た。

廊下に出ると森山の後姿が見えた。
彼は志望校に合格したそうだ。
森山が立ち止まってこちらを振り返る。
目が合った瞬間。
私は慌てて階段を降りた。
「野々宮！」
森山の声がしたが無視して校舎を出た。
雨がパラパラと降り出していた。

校門をくぐろうとした時。
「なっちゃん！」
その声にぴたりと足を止める。
手で涙を拭い、振り返る。
茜が走ってこちらに来た。

そして一冊の本を私に差し出した。
それは『初恋』だった。
「なに？　もう読んだでしょ」
「読んでない」
「読んだよ」
「最後まで読んでないでしょ！」
茜はそう言うと漫画の最後のページを開いて私に見せた。
それは。
学校を出て行く愛を武が走って追いかけ、愛が武に告白するシーンだった。
「ね？」
茜がそう言って笑った。
雨はいつのまにか止んでいた。
空を見上げる。
「・・・・・・あ」
私がそう言った瞬間。
「野々宮ー。お前、なんで逃げるんだよ」
森山の声が聞こえた。
私は彼の顔を見ると。
思いきって、その手をとった。
そして走り出す。

「な、なんだ？！」
「いいから！」
私はそう言って校舎に戻った。
階段を一段飛ばしで駆け上がる。
右手が暖かい。

勢いよく屋上のドアを開ける。
春の風が火照った顔に心地良い。

フェンスの前に立つと真っ直ぐ前を見た。
「・・・・・・虹、だな」
森山がポツリと言う。
「うん。虹」
「でも、校門のとこでも見えたよな」
「屋上がいいよ」
「まあ・・・・・・確かに・・・・・・」
森山はそこまで言うとハッとして視線を落とした。
私は彼の左手を掴んだままだった。
「ごめん」
森山がそう言って、手を離そうとした。
しかし。
私は彼の手を離すどころか、強く握った。
地面に視線を落とした。
「野々宮？」
彼の言葉に、唇をギュッと噛む。
そして。
私は勢いよく手を離した。
顔を上げ、森山を睨みつけるようにして言った。
「悔しい」
「え？」
「森山が私の初恋だなんて！」
虹は、既に消えていた。

雨が止んだ。
私はさしていた傘を閉じて立ち止まった。
空には虹がかかっていた。

「どうせなら屋上で見たかったな」

いつのまにか隣に立っていた男性がそう言う。
「そうだね」
私は笑いながら答えた。
「これから四年間、一緒だな」
森山が空を見つめたまま言う。
「大学生の内に何回、虹が見られるかな」
私も空を見ながらそう呟いた。

虹が消えた。
私と森山は手を繋いだまま歩き出した。

（おわり）

## （後書き）

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。

２０１０年３月９日に書いたものです。

春だったこともあり、初恋というテーマで書きたいなあと思って、

こういう話になりました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3228m/

---

初恋と初恋。

2010年10月8日13時23分発行